

アメリカ学会 第40回年次大会要項・報告要旨

1. 月日 2006年6月9日(金), 10日(土), 11日(日)
2. 場所 南山大学(〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18)
会場校連絡先 川島正樹(電話 0568-91-6198) <kawashma@nanzan-u.ac.jp>
3. プログラム

第2日 6月10日(土曜日)

- 自由論題 第1報告(9:00~9:35) 第2報告(9:40~10:15) 第3報告(10:20~10:55)
第4報告(11:00~11:35) 第5報告(11:40~12:15)

自由論題A 司会 長畑明利(名古屋大学)[G棟21教室]

- 佐竹由帆(青山学院大学(講)) 「Anais Ninのセクシュアリティ―『歴史化』をめざして」
日影尚之(麗澤大学) 「ジャック・ロンドンと消費文化―*The Game*と*The Valley of the Moon*」
荒木陽子(敬和学園大学(講)) 「現代カナダ英語文学に表象される『カナダ人』、『アメリカ人』、『ネイティブ』
像―カナダ建国百周年期の小説を中心に」
中村善雄(長岡技術科学大学) 「サイボーグの考古学―ナサニエル・ホーソーンとテクノロジー」

自由論題B 司会 野村達朗(愛知学院大学)[G棟22教室]

- 佐藤千登勢(筑波大学) 「ニューディールとアメリカ労働立法協会―ウィスコンシン州における失業補償法の制定を中心に」
佐々木 豊(相愛大学) 「“赤狩り”時代のエドワード・カーター(太平洋問題調査会元事務総長)と市民的自由」
小峯弘靖(PHP総合研究所) 「在日米軍再編と地方自治体―神奈川県相模原市をケースとして」
加藤一誠(日本大学) 「アメリカの道路政策における州権の強化」
榊原勝夫(同志社大学名誉教授) 「チャイナ・バッシングはありうるか―ジャパン・バッシングとの対比において」

自由論題C 司会 高木(北山)真理子(東海女子大学)[G棟23教室]

- 大井由紀(一橋大学(院)) 「アメリカナイゼーションとチャイニーズ・ディアスポラ」
深見 麻(東京大学(院)) 「市橋倭の思想―対日イメージの悪化と在米日本人知識人」
村川庸子(敬愛大学) 「市民権を『放棄』させる論理―Abo, Murakami (1945)とHamdi (2004)の場
合」
森 仁志(武蔵大学(講)) 「ハワイ州ホノルルにおける同性愛者の社会的アイデンティティ」

自由論題D 司会 内田綾子(名古屋大学)[G棟24教室]

- 丸山雄生(一橋大学(院)) 「19世紀末におけるエキゾチックな動物の展示とセンチメンタリズム―P. T.
バーナムのサーカスとジャンボを例として」
福田敬子(青山学院大学) 「プラットフォームの奇跡―19世紀中葉アメリカの健康改革運動と文人たちの奇
妙な関係」
青山大作(バーミンガム大学(院)) 「Thinking about Coolness in the Blackness of Hip Hop beyond ‘Gender’」
北原妙子(東洋大学) 「F. マリオン・クロフォードの遺産―『コルレオーネ』と『ゴッドファーザー』」

昼食(12:30~13:30)

理事・評議員会(12:30~13:30)[本部棟3F会議室A・B・C]

会長講演(13:40~15:10)[G棟30教室]

- 司会 五十嵐武士(東京大学)
Karen Halttunen (President of ASA, University of Southern California)
“Transnationalism and American Studies in Place”
油井大三郎(アメリカ学会会長, 東京女子大学)
“Historical Lessons in Asian-American Relations: Searching for the Inter-Civilizational Dialogue”

シンポジウム「宗教と現代アメリカ社会―保守化の深層」(15:20~17:50)[G棟30教室]

- 司会 増井志津代(上智大学)
堀内一史(麗澤大学) 「宗教保守派の政治参加―白人プロテスタントを中心に」
木鎌安雄(英知大学) 「アメリカ・カトリックの現在」
上西哲雄(北星学園大学) 「ハックルベリー・フィンと『宗教保守』」
森本あんり(国際基督教大学) 「不寛容の論理―保守源流の再考」
コメント 奥山倫明(南山大学)

懇親会(18:00~20:30)[第1学生食堂]

第3日 6月11日(日曜日)

部会A 「連邦主義の現在」(9:00~11:30) [G棟21教室]

司会 岩野一郎(南山大学)

西山隆行(甲南大学)

「アメリカ型福祉国家と連邦主義」

渋谷博史(東京大学)・根岸毅宏(國学院大学) 「アメリカの福祉改革と分権システム」

会 沢 恒(北海道大学)

「レーンキスト・コートの連邦制法理」

コメント 有賀 貞(聖学院大学)

部会B 「ラティノー研究と『境界』——四つの異なるアプローチ」(9:00~11:30) [G棟22教室]

司会 庄司啓一(城西大学)

村田勝幸(北海道大学)

「交差点のラティノー/ナ(史)研究——移り変わるフレームワーク、合流する
パスベクティヴ」

黒田悦子(国立民族学博物館名誉教授) 「文化ナショナリズムとトランスナショナル共同体——メキシコ系アメリカ人とメキシコ人のアメリカ対策」

牛田千鶴(南山大学)

「“ラティノー”とはいかなる人々か——呼称の変遷にみるエスニシティと政治性」

越川芳明(明治大学)

「バリオの文学」

ワークショップA “Relocating ‘America’ in American Studies” (9:00~11:30) [D棟31教室]

司会 東自由里(立命館大学)

Sheila Hones (University of Tokyo) “Disrupting Location”

Paul Kramer (Johns Hopkins University) “Connecting Pasts: Transnational and Imperial U. S. Histories”

川島浩平(武蔵大学)

“American Sports as an Invisible yet International Field of Inquiry”

新理事会 (11:40~13:00) [本部棟3F会議室A・B・C]

分科会 (11:40~13:30) および昼食

総会 (13:30~14:00) [G棟30教室]

部会C “New Orleans” (英語) (14:10~16:40) [G棟21教室]

司会 太田和子(共立女子大学)

原口弥生(茨城大学)

“Extraordinary Disaster, but Not an Isolated Case: Hurricane Katrina, Environmental Protection and New Orleans”

奥出直人(慶應義塾大学)

“Hurricane Katrina and Wikipedia: The Use of Next Generation Information and Communication Technologies in Epic Disasters”

中山俊宏(津田塾大学)

“Hurricane Katrina and Its Impact on the Political Discourse in the U.S.”

コメント Julia Leyda (Sophia University)

部会D 「サリンジャーと戦後アメリカ」(14:10~16:40) [G棟22教室]

司会・報告 田中啓史(青山学院大学) 「『ライ麦畑でつかまえて』と映画」

井上謙治(明治大学名誉教授・桜美林大学名誉教授) 「戦争体験と『ライ麦畑でつかまえて』」

高橋美穂子(群馬県立女子大学) 「サリンジャーの描く女性たち」

三浦玲一(一橋大学)

「人種とイノセンスとポピュラリティ」

ワークショップB “New Dynamics between the United States and the Asia/Pacific Community” (14:10~16:40) [D棟31教室]

司会 片桐康宏(東海大学)

Curtis Marez (University of Southern California) “American Studies, Asia Pacific Studies, and Latin American Studies in the World System: Lessons from the History of Global Cinema”

Gayle Sato (Meiji University)

“Manzanar Murakami and Kafka on the Shore: A Transnational Reading of Japanese/American War Memory in Novels by Karen Tei Yamashita and Murakami Haruki”

Sung Hee Park (Ewha Woman's University) “Truth or Dare: The Changing Views on Opinion in News”

- ①懇親会は事前の申し込みが必要です。払い込まれた懇親会会費は、いかなる事情があってもお返してできませんので、ご注意ください。②年会費の当日支払いは受け付けませんのでご了承ください。③非会員の大会参加費は1,000円です。会場受付にてお支払いください。
5. 昼食 9日(金曜)は第1学生食堂(9時~17時)と「ダガネ」(10時~16時)、10日(土曜)は第1学生食堂(10時~15時)と「ダガネ」(10時~15時)、11日(日曜)は第1学生食堂(11時~14時)と「ダガネ」(11時~14時)が営業していますので、ご利用ください。

自由論題 A

(9時~11時35分
司会 長畑明利(名古屋大学))

Anais Ninのセクシュアリティ——「歴史化」
をめざして

佐竹由帆(青山学院大学(講))

Anais Nin (1903-77) は7巻に及ぶ *The Diary of Anais Nin* で知られる作家だが、経済的理由から *Delta of Venus*, *Little Birds* というエロティカを1940年代に書き、結果的にこれらが著作の中で最もよく売れた作品となった。Ninにとって必ずしも納得のいく作品ではなかったようだが、「男の独壇場であったものへ、女も手を染めてみようという、ささやかな努力の芽生え」であるこれらの作品は、女性によるエロティカが稀であった時代性を考えると、女性とセクシュアリティ、そしてその表現をめぐる問題について考察する上で、貴重な資料として読むことができるだろう。Žižek は Benjamin に触れて、勝者の歴史とは対照的な、被抑圧階級寄りの、過去の失敗を未来における反復行為の達成によって、遡及的に救済しうる非連続的な歴史、という考えを紹介している。このような歴史観と、Judith Butler の「パロディ的反復」による「セクシュアリティやアイデンティティの攪乱の可能性」という観点を援用しながら、Ninのセクシュアリティの「歴史化」について考察したい。

ジャック・ロンドンと消費文化——*The Game*
と *The Valley of the Moon*

日影尚之(麗澤大学)

結婚間近のカップルがオークランドのデパートで生染め絨毯に「目を魅かれる」場面で始まるロンドンの中編小説 *The Game* (1905) は、「見ること」と「魅惑」についての物語だ。男装したジュヌヴィエヴがジョウのボクシングの試合を覗き「見る」のが小説の後半である。*The Game* と似た人物設定の *The Valley of the Moon* (1913) では、労働者階級の夫婦がオークランドの都市生活を捨て、昔ながらの農民暮らしをするために公有地を探す旅に出る。二人が反発しながらも学んでいくのは、都市の市場(消費者)を意識した田舎(郊外)でのアグリビジネスの実態等であり、この小説でも美しい花で人の「目を魅く」手法・装置への言及がある。また、

ニッケル・オデオン
5セント劇場で見た映画の光景に魅せられたサクソンは、「映画を現実にするために」都市を離れる。ジョナサン・オーウェルバッハは、世紀転換期のアメリカ文学市場で成功するためには、個々の作品の中身そのものというよりは作家の「名前」や「イメージ」の流通が重要であるとロンドンが早くから考えていた、と指摘する。当時の読者=消費者を含めて、消費文化とロンドンの関係は考察すべき問題だと思われる。

現代カナダ英語文学に表象される「カナダ人」、
「アメリカ人」、「ネイティブ」像——カナ
ダ建国百周年期の小説を中心に

荒木陽子(敬和学園大学(講))

アメリカ研究の研究対象「アメリカ」を如何に定義しパースペクティブ化するかは大きな問題である。本報告では、「アメリカ」は「アメリカ合衆国」のみを指す語ではないとする Winfried Siemerling らの議論を基にし、1960年代から1970年代のカナダ文学ナショナリズムの最盛期にカナダで書かれた英語系文学において、同じ北米人である「アメリカ人」がどのように他者化されているか、また同時にカナダ人の「アメリカ人性」が、どのように表象されているのかを中心に考察する。考察にあたっては、両者の関係をファースト・ネーションズとの接触を交えながら興味深く描く3作の小説、Mordecai Richler の *Incomparable Atuk* (1963)、Margaret Atwood の *Surfacing* (1972)、Robert Kroetsch の *Gone Indian* (1973) に注目する。これらナショナリズム期の小説の中で、カナダ人アイデンティティ確立のために他者化されるアメリカ人像が映し出すのは、両者の境界の曖昧さなのではないだろうか。

サイボーグの考古学——ナサニエル・ホーソー
ンとテクノロジー

中村善雄(長岡技術科学大学)

Nathaniel Hawthorne の作品にはサイボーグ・イメージを誘発する人物が登場する。短編“The Artist of the Beautiful”の時計職人Owen Warlandは実物に違わぬ蝶

のオートマトン（「自動機械」）の製作者であり、「Drowne's Wooden Image」の木彫師 Drowne は、理想の女性像を具現化したピグマリオン現代版である。「The Birthmark」の科学者 Aylmer には、人工生命体ホームクルスを生み出した錬金術師パラケルススとの類似性が仄めかされ、助手の Aminadab は「人間機械」と称されている。また、「Rappaccini's Daughter」の Beatrice

は、有害植物に免疫力をもつ異質な女性である。本発表では、これらのサイボーグ・イメージを生み出す歴史的・文化的背景を La Mettrie の「人間機械論」や Mary Shelly の Frankenstein と重ね合わせて考察すると共に、機械化・産業化へ向かう当時のアメリカ社会の中で、Hawthorne のテクノロジーに対する思想を浮き彫りにする予定である。

自由論題 B (9時～12時15分 司会 野村達朗 (愛知学院大学))

ニューディールとアメリカ労働立法協会——ウィスコンシン州における失業補償法の制定を中心に

佐藤千登勢 (筑波大学)

本報告ではニューディール期の労働立法を再検討する試みとして、1935年社会保障法の制定以前に唯一の失業保険制度を州レベルで実現した1932年ウィスコンシン失業補償法を取り上げ、その思想的な流れとそれを取り巻く政治的な力学について論じる。同法はアメリカ制度学派の重鎮であるジョン・R・コモンズが1920年に作成した法案に基づき、「ウィスコンシン派」とよばれる労働法の専門家が州産業委員会を中心に勢力を拡大することによって制定された。この「ウィスコンシン派」は、その後ローズヴェルト政権にも重用され、社会保障法の法案作成に重要な役割を果たしており、既存の研究ではこうした人脈上の結びつきが強調されている。ここでは、フィリップ・ラフォレット知事を中心とした共和党の革新派と州労働連盟、農民組織の連携とそれに拮抗した資本家と保守派の主張を検討することによって、雇用主単独拋棄制による企業別勘定や経験料率制などが同法に盛り込まれた理由を探る。さらに同法とは異なるタイプの失業保険を提唱した「オハイオ派」との対立がアメリカ労働立法協会の内部で見られたことに着目し、同法の思想的な特徴と限界を明らかにする。

“赤狩り”時代のエドワード・C・カーター (太平洋問題調査会元事務総長) と市民的自由 佐々木 豊 (相愛大学)

本報告では、アジア・太平洋問題を専門に討議・研究する初の民間団体として知られる太平洋問題調査会 (IPR) の事務総長を務めたエドワード・C・カーターの“赤狩り”時代 (1950年代初頭) の言動を中心に取り上げながら、冷戦の国内的文脈を分析・考察する。

IPRは戦中・戦後期の国際会議や研究事業の中で中国国内情勢や対日戦後処理など時局の政治問題を積極的に

取り上げるが、国務省を含む政府機関とも接触ルートを有していたため、反共主義政治勢力によって「中国喪失」の責任を負うスケープゴートとされた。この間、カーター自身も上院国内治安小委員会に召喚され、IPRを「親共産主義団体」に誘導した責任者の一人として糾弾された。

以上のような政治的文脈の下、カーターがIPRの活動を如何に擁護しながら反共主義者によるIPR攻撃に対応したのかに関して、IPR関係者との書簡やメモランダムなどを用いて分析する。その際、カーターが、非政府間外交に従事する民間団体の使命、「非党派性」の活動原則、言論の自由を含む市民的自由の維持の問題をどのように捉えていたのかについて論じながら、国際主義者としてのカーターの再評価を試みたい。

在日米軍再編と地方自治体——神奈川県相模原市をケースとして

小峯弘靖 (PHP総合研究所)

米軍再編に伴い、在日米軍に関する再編協議が2003年より日米両政府間で行われているが、その中間報告が昨年10月29日に発表された。内容は日米の同盟関係を強化するもので、米軍基地を抱える自治体の多くは基地の恒久化や機能強化につながると反発している。

なぜ自治体は米軍の駐留に反対するのか——その理由を明らかにするため、キャンプ座間、相模総合補給廠、相模原住宅の3つの米軍施設を抱える神奈川県相模原市に焦点を当てる。

中間報告でキャンプ座間には米陸軍第一軍団司令部等を改編した統合作戦司令部が設置されることになった。また、中間報告前に報道があった相模原総合補給廠の一部返還は実現せず、市は日米政府の決定に強く反発している。小川勇夫市長は「市にとって何一つよい話はない。まったく受け入れられない」というコメントを発表し、市議会は11月11日、「在日米軍再編の中間報告に断固抗議し撤回を強く求める決議」を全会一致で可決した。

本報告では、なぜ相模原市が米軍基地に反対するのか、2004年春から始まる市内米軍基地に関する新聞報道の

内容観察と、主に市役所職員と市議会議員への面接を通して、地元の主張を分析する。

アメリカの道路政策における州権の強化

加藤 一 誠 (日本大学)

アメリカの道路に対する連邦補助は2004年度で310億ドルにのぼり、燃料税を中心として道路利用者が負担している。そして、各州で徴収された連邦燃料税は連邦道路信託基金に集められ、連邦政府がそれを各州に配分している。同時に、各州は独自の州燃料税を徴収するため、道路利用者は連邦と州のふたつをあわせた燃料税を負担している。

1980年代以降、連邦から州への配分に際して、州から基金への納付額と連邦から州への配分額の比(配分の全国シェア/納付の全国シェア)が考慮されるようになった。2005年に成立した新しい交通立法ではシェア比を92%とし、それ以上を各州に還元するというルールに改められた。1980年代に85%であったシェア比は、徐々に上昇している。このことは、州際道路ネットワークが完成し、都市部を抱える州が「自らの税金を自らのために使う」という主張を強めたとみることができる。

報告では、州や地域別の受益と負担の変遷や制度変更

が財源配分に及ぼした影響を定量的に明らかにし、道路政策において州権が強化されていることを明らかにする。

チャイナ・バッシングはありうるか——ジャパン・バッシングとの対比において

榊原 胖 夫 (同志社大学名誉教授)

中国の対米貿易黒字は2005年には2000億ドルを超え、アメリカの巨大な貿易赤字の原因となっている。過去のジャパン・バッシングの例からすると、チャイナ・バッシングがおこって当然である。しかしアメリカには中国にたいする警戒感はあるけれども、組織的なバッシングはまだない。なぜなのだろうか。

アメリカが好景気で失業率が低いからであろうか。労働組合が弱くなったからであろうか。アメリカをとりまく政治的、外交的環境が変わったからであろうか。ジャパン・バッシングのときは、その中心になった何人かの経済学者が日本経済の構造的特殊性を強調し、アメリカ政府はその改善をせまった。いま中国経済の特殊性をあげつらい、批判する学者はほとんどいない。ジャパン・バッシングは90年代にはいってジャパン・バッシングになったといわれたが、チャイナ・バッシングの可能性はないようにみえる。それはなぜかなどについて議論を喚起するための position paper である。

自由論題 C (9時~11時35分 司会 高木真理子 (東海女子大学))

アメリカナイゼーションとチャイニーズ・ディアスポラ

大井 由 紀 (一橋大学 (院))

本報告では、「中国系」というエスニック・アイデンティティがアメリカでどのように形成され、かつこれがどのようにアメリカナイゼーションとチャイニーズ・ディアスポラを構成したか論じる。そこで注目したいのは、19世紀末にシカゴやニューヨークで活躍した黄清福である。移民第一世代である黄は、在米中国人のアメリカナイゼーションを主張し、「中国系アメリカ人」という言葉を初めて使用したことで知られている。さらに、アメリカでの市民権・選挙権獲得運動を率いた活動家でもあった。その一方で、アメリカ人の改宗を目標に掲げた儒教の布教活動を展開し、中国の革命推進派とも関わりをもつなど、中国とのトランスナショナルな関係を維持した。このように、中国を否定しつつも愛国感情を鼓舞し、なおかつアメリカナイゼーションを進めようとする姿勢は、いっけん矛盾しているかに思われる。この「矛盾」の背景について本報告では、黄が執筆したエッセイ、

新聞記事などに基づいて考察するとともに、アメリカナイゼーションとチャイニーズ・ディアスポラ形成が結びついていたことを指摘する。

市橋倭の思想——対日イメージの悪化と在米日本人知識人

深 見 麻 (東京大学 (院))

市橋倭 (1879~1963) は、スタンフォード大学において歴史学を修め、後に同大学において日本文化・日本史の教授となった人物である。本発表は、日系移民研究において初期の研究者として名前が言及されることはあっても、活動や研究(特に移民研究以外の)の内容について詳しく論じられてこなかったこの一学者の生き様と思想を、移民問題や海軍軍縮など米国における対日イメージが悪化した時期に焦点をあてて考察するものである。

具体的にはアメリカにおける日本人移民社会について論じた *Japanese Immigration: Its Status in California* (1915) 及び *Japanese in the United States* (1932) と、ワシントン海軍軍縮会議に関する *The Washington*

Conference and After (1928) などの著作を中心に、当該時期の日本の政治的立場を彼がどのようなスタンスで擁護していたのかを考察する。また新聞、雑誌記事、外交記録等周辺史料も適宜織り交ぜ、当時の日本と彼の生きた在米日本人社会を取り巻いた環境との関連、アメリカで教育を受けた日本の知識人としての立場を多角的に浮かび上がらせることに気を配りたい。

市民権を「放棄」させる論理——Abo, Murakami (1945) と Hamdi (2004) の場合 村川 庸子 (敬愛大学)

9・11 同時多発テロと真珠湾をアナロジーとする議論の中で、日米戦争中の日系アメリカ人の経験が再び衆目を集めている。現政権の外国人政策を「比較的抑制の利いた」政策であり、過去の経験に学んだのだとするナイーブな議論も散見される。

本報告では 1944-45 年の日系二世の市民権「放棄」と国外退去の問題を 2004 年のサウディ・アラビア系アメリカ人のタリバン兵士の問題との関連でとりあげる。1944 年 7 月の市民権放棄法はこれまで収容政策の中で生まれた反米＝親日的な二世のトラブルメーカーを国外退去させるための便法であると見られてきた。5,500 余名が生得の市民権を「放棄」し「敵性外国人」となったが、この問題については一般の社会でも従来の歴史研究の中でも不思議なほど注目されることがなかった。日米戦争という特殊な時期の一民族集団、その中でもごく一部の人々だけを対象とするはずであったこの法の条文が恒久化され、60 年を経た現在、連邦議会で延長を巡る

議論の続く愛国者法等にも読み込まれ、ハムディ判決後の原告の処分につながっていることを指摘する議論もない。市民権放棄法のもつ歴史的・現代的意義をアナロジーとしてではなく連続性において論じたい。

ハワイ州ホノルルにおける同性愛者の社会的アイデンティティ

森 仁志 (武蔵大学 (講))

ヘテロセクシュアルな性的規範が支配的なハワイでは、同性愛者がオープンに交流できる場は極めて限られており、彼らが他の住民や観光客の眼に入ることはほとんどない。本発表ではホノルルにあるゲイバーの参与観察をもとに、同性愛者たちが様々な言語的・身体的表現を通して、いかにゲイとしての仲間意識を顕在化させていくかに注目をする。とりわけ、セクシュアリティがもっとも強調される文脈においても、ハワイにおけるエスニシティや社会階層などの社会的アイデンティティがどのような形で重層的・同時に意識されるかについての考察を行う。具体的には、フィールドワークに基づく民族誌を資料として、ある発言の文脈や背景を詳細に提示することにより、ひとつのレベルの社会的アイデンティティのみを抽出するのではなく、現実の日常生活での社会的アイデンティティの重層性や混交性についてより包括的に理解することを試みる。こうした作業は、特定の個人が、ある特定の文脈において、複合的なプロセスを経てアイデンティティを意識し語る状況について具体的に提示し考察することを可能にするものである。

自由論題 D (9 時～11 時 35 分 司会 内田 綾子 (名古屋大学))

19 世紀末におけるエキゾチックな動物の展示とセンチメンタリズム——P. T. バーナムのサーカスとジャンボを例として

丸山 雄生 (一橋大学 (院))

P. T. バーナムの「地上最大のショー」は巨大象ジャンボをはじめとする多くの動物を展示していたが、それは観客にとって馴染みのない異国の動物を身近なペットへと転化させる装置だった。近代の動物園が帝国主義の産物であったように、サーカスにおける動物の展示もまた外国への関心や欲望と深く関係していた。アフリカやアジアから来た動物はしばしば反理性的であり危険であると強調されたが、一方でそれらが持つ野生や神秘性はエキゾチックな魅力を伝えるものでもあった。ジャンボはこの二面性をよく表しており、人が不安を感じるほど

の巨大な体躯でありながら、「子供たちの大きなペット」と呼ばれる従順さも持ち合わせていた。そのジャンボを 1882 年にバーナムがロンドン動物園から買い取った際に起きた反対運動とセンチメンタルな同情の声、また 1885 年にジャンボが事故死した際になされた悲劇的な脚色は、ジャンボが制御不能な外国の動物から恭順でドメスティックなペットへと馴化され、文明が失ってしまった無垢な自然状態に郷愁を覚えるヴィクトリア文化のエキゾチシズムを満たす存在となったことを示している。

ブラットルボロの奇跡——19 世紀中葉アメリカの健康改革運動と文人たちの奇妙な関係 福田 敬子 (青山学院大学)

バーモント州の小さな町ブラットルボロは、1840 年

から 60 年にかけて健康改革運動のメッカであった。思想的弾圧から逃れて渡米したドイツ人医師ウェッセルヘットがヨーロッパから持ち込んだ「水治療法」がこの町で大当たり。たちまちアメリカ中から患者が押しかける健康リゾートの町となったのである。多くの医者がこの治療法を真似たが、彼らは、自分は人だけではなく、社会の健康をも取り戻そうとしているのだという強い自負を持ち、奴隷制廃止運動や女性解放運動ともつながりを持っていた。そのため、診療所は文化人のたまり場ともなり、社会改革をめぐる熱い議論が交わされた。患者の中には、キャサリン・ビーチャー、H・B・ストウ夫妻、フェニー・ファーン、J・W・ハウ、ヘレン・ハント、J・R・ローウェルなどがいた。また、ウェッセルヘットとマーガレット・フラーが親しかったことを不愉快に思ったホーソーンはこの医師を『プライズデイル・ロマンス』のウェスタベルトのモデルにしたという逸話も残っている。この多くの文人をひきつけた謎の治療法と、社会改革の理想に燃えたアメリカの夢の時代の奇妙な関係を、現地の資料調査結果をもとに探ってみたい。

Thinking about Coolness in the Blackness of HipHop beyond “Gender”

Daisaku Aoyama

(graduate student, University of Birmingham)

While the work of many African-American artists since the late 1980s has established hip hop as the most popular genre in the American music industry and beyond, the literature on African-American Studies and Cultural Studies has also given attention to the ways in which these artists articulate themselves in this particular genre. One of the most controversial aspects of hip hop is how the ideology of gender is represented and reproduced within it. While most of the research has been written about the social impact of hip hop upon the values of African-American men and women, it has failed to consider hip hop's popularity in

the wider sphere of society. In this paper, then, I will examine how the market value of music has profoundly affected the representations of gender in hip hop. I begin with identifying the typical representations of misogyny in the work of African-American male artists, and then those of sexual obscenities in the work of African-American female artists. I will finally suggest that hip hop is popular because its representations of gender can also be seen as ambivalences, contradictions, and transformations. The aim of this paper is therefore to explore the reason why the representations of gender in hip hop have affected its substantial market value in contemporary societies.

F. マリオン・クロフォードの遺産——『コルレオーネ』と『ゴッドファーザー』

北原 妙子 (東洋大学)

「ロマンス作家」として知られる F. Marion Crawford は、彼の代表作でローマ貴族の三代記、Saracinesca サーガ続編において、シチリア島のマフィアを扱う。その *Corleone: A Tale of Sicily* (1897) で作者は、「お上品な伝統」のタブーを破り、暴力や性といった要素を大胆に扱い、アクションの多い映画的な描写を展開する。これは、アメリカ映画/小説を含む “mob narrative” の原型の一つとみなせる。特に *Corleone* という題名をはじめ、物語の諸側面は、20 世紀を代表する mob narrative の *The Godfather* (1969) との間テキスト性を想起させるので、本発表では両作品の比較考察を試みたい。具体的には相互関連性が高いと思われる、クロフォードの *Corleone* と Mario Puzo の *The Godfather* のテキスト分析を中心に、必要に応じて後者の映画版にも言及する。現在は大衆作家として真剣に評価されていないクロフォードの作品が、どのように現代のアメリカン・ベストセラー小説、そしてアカデミー賞受賞作品につながっていったかを探りたい。

ASA 会 長 講 演

(13 時 40 分～15 時 10 分)
司会 五十嵐武士 (東京大学)

Transnationalism and American Studies in Place

Karen Halttunen
(ASA President, University of Southern California)

Since the 1960s, three successive and inter-related crises have challenged American studies practitioners to re-think our most fundamental assumptions about our area of scholarship. The first challenged the consensus-oriented myth-and-symbol school of the 1950s by exploring a rich proliferation of “minority” histories and identities. The second responded to Benedict Anderson’s concept of the nation as “imagined community” by exploring the fictive qualities of American bourgeois nationalism. And the third has registered a growing awareness of how globalization has undermined an understanding of the American nation-state as a neatly bounded container for a unified and meaningful national culture, and turned our attention to transnational cultures and identities. This third crisis has generated an ever-growing body of transnational work—evidenced, for example, in the International Symposium on “Framing American Studies in Trans-Pacific Perspective.” At the same time, it has pointed many American studies scholars, not to the global, but to the local, in a renewed attention to what I called in my ASA presidential address last fall the “groundwork” of American studies. “Groundwork” is highly attentive to cultural geography’s emphasis on space and place, and focuses on regions, natural landscapes, local communities, neighborhoods, and dwellings.

Once we turn serious historical attention to the local, it immediately becomes clear that we have overstated the dominance of nationalist ideas and experiences in the lives of ordinary people in the past. Recent studies of the antebellum “national” landscape, for example, have treated highly specific, local scenes as unquestioned representations of a generically “American” nature; just as studies of 19th-century historiography have assumed that the master narratives of George Bancroft and Frederick Jackson Turner dominated the practice of history. But it is we ourselves who have privileged the “national” in our study of these two major cultural expressions—landscape painting and historical practice— and thus failed to recognize the power of place—local place—in 19th-century culture.

My own current work is on New England antiquarianism from 1790 to 1870, a historical and natural-historical project that focused not on the national, but the local and regional past, in an effort to establish a deep sense of antiquity on the land. New England antiquarians regarded history not as a horizontal time-line, but as a vertically layered process that had left records on and in the land beneath their feet. They explored their region’s “natural history,” its “ancient” colonial past, its Native American past before the European encounter, and its pre-Columbian visitors including Vikings, Phoenicians, Siberian Tartars, and wandering Mayans. In a related effort, New England geologists moved even deeper into antiquity to uncover the geological processes that had shaped their region, and to resurrect the traces of extinct creatures that we would call dinosaurs, calling them the “preadamite inhabitants” of New England.

New England cultural workers embraced a far more hybrid and eclectic history than the single-stranded story of the Pilgrim Fathers, embracing not just white colonists, but Native Americans, visitors from the Middle East and Asia, and even extinct non-human “inhabitants” of their land, constructing what cultural geographer Doreen Massey has called “a global sense of place” that was hybrid, fluid, and contested— and yet profoundly local.

アメリカ学会会長講演

(13時40分～15時10分)
司会 五十嵐武士(東京大学)

Historical Lessons in Asian-American Relations: Searching for Inter-Civilizational Dialogue

Daizaburo Yui
(Tokyo Woman's Christian University)

As a result of the simultaneous multiple terror attacks of Sept. 11, 2001, and the ensuing “war on terror,” I have the strong impression that the gap between the United States and the Islamic regions of the world has grown even deeper. Immediately after the Sept. 11 incident, President Bush criticized terrorism as barbaric conduct repudiating democratic government and civic liberties, and defined the “war against terror” as a “war to defend civilization.” Reducing the problem to a clash between “civilization and barbarism,” however, runs the risk that the cause will be sought only on the side of the terrorists, leaving unquestioned problems with US policy in the Middle East and America’s promotion of trade liberalization, among other policies.

However, 2001 had been declared a “year of dialogue among civilizations” upon the proposal of President Khatami of Iran. As a result, the Sept. 11 incident, although it demonstrated the depth of the “gap among civilizations,” also brought into sharp relief the importance of finding a way to make a “dialogue among civilizations” possible. For scholars engaged in American studies research in Asia, in particular, it is an important task to develop ways to narrow the gap between Asia and the United States.

For Japanese scholars of American studies, there is a need to bring to light the historical lessons that can be learned from the process that led to Japan’s reckless attack of 65 years ago on the United States. Many studies to date have taken the view that war between Japan and the United States became inevitable because of the stark differences between the political systems of militarism and liberal democracy. It is a fact, however, that negotiations seeking to avert war continued between the two governments until the eve of the beginning of hostilities, and clarification of the reasons causing these negotiations to end in failure could serve as an important historical example in considering how to develop methods for a “dialogue among civilizations.” In addition, by comparing the “civilizational gap” of 65 years ago between Japan and the United States to the current gap between the Islamic world and the United States, I hope to illuminate how this “civilizational gap” itself has changed historically and offer some clues that may aid in achieving a “dialogue among civilizations” today.

シンポジウム 「宗教と現代アメリカ社会——保守化の深層」

(15時20分～17時50分
司会 増井志津代(上智大学)
コメント 奥山倫明(南山大学))

宗教保守派の政治参加——白人プロテスタントを中心に

堀内一史(麗澤大学)

本報告でいう宗教保守派とは、現代アメリカ社会の世俗化を背景としてそれに対抗する形で、プロテスタント福音派、キリスト教原理主義者など主に白人の保守的なキリスト教徒を動員して伝統的諸価値を擁護・促進する政治・社会運動を指す。1970年代末から80年代までは、ジェリー・ファルウェルのモラル・マジョリティが、90年代以降はパット・ロバートソンのクリスチャン・コアリションが中心となり、保守的なキリスト教福音派を動員して、共和党保守派議員を州および連邦議会に、保守派委員を地方教育委員会に送り込むなどして、政界や教育界に影響力を及ぼしてきた。こうした中で、保守的な福音派が信奉する福音派プロテスタンティズムはアメリカの公共宗教もしくは市民宗教として、レーガン政権、父ブッシュ政権、第1期および第2期ブッシュ政権誕生の一翼を担った。

宗教保守派は、クリスチャン・コアリション、フォーカス・オン・ザ・ファミリー、ファミリー・リサーチ・カウンスル、イーグル・フォーラムなどの諸団体から構成される。これら諸団体は宗教保守派の牽引役として、選挙政治のほかに人工中絶反対、同性婚への反対、進化論反対などの政策課題に取り組んできた。しかし、97年のラルフ・リードの辞任以来クリスチャン・コアリションの勢力衰退が顕著となり、その影響から宗教保守派は減退傾向にあるといわれる。

一方、次世代を担う保守的な福音派を養成する高等教育機関のひとつとして最近注目を集めているのが、パトリック・ヘンリー・カレッジである。宗教保守派のマイケル・ファリスが学長を務める同大学はホームスクーリングを受けた生徒を中心に募集し、名門大学に並ぶ人数の実習生をホワイト・ハウスや保守派共和党連邦議員の事務所へ送り込んでいる。同大学卒業生をスタッフとして雇用する連邦議員も少なくない。共和党の主要な支持勢力である宗教保守派の今後の動きが注目される。

アメリカ・カトリックの現在

木鎌安雄(英知大学)

アメリカ・カトリックの現在を3つの点から報告し

ます。

(1)「反カトリック感情」(Anti-Catholicism)は、第2次世界大戦後はなくなってきた。その理由は、①冷戦構造、②カトリック信徒の社会的地位の向上、③カトリック教会内の意識改革、をあげることができる。1992年から2000年にかけて、「反カトリック感情」が再び生じた。その理由は、①性、ジェンダー、教育におけるIDなどの問題でカトリック教会が論争的な立場になっている。②司教団が純粋な資本主義、死刑、核防衛政策、避妊、同性婚に反対している。③メディアがカトリックの現状を批判、風刺しているためである、と言われている。

(2)「教会における性的虐待」については、多くの信徒が①恥ずかしいと感じ、②司教団を非難し、③メディアを非難している。これについての2人の学者の解釈と意見を紹介する。

(3)「現代カトリックの保守化」については、①信徒の性に関すること、②家庭と教会との関係、③ヨーロッパ系とヒスパニック系との差異、④カトリック教会への転籍者の傾向、⑤教会活動の実践者数、⑥その他具体的な出来事を紹介する。

ハックルベリー・フィンと「宗教保守」

上西哲雄(北星学園大学)

アメリカ合衆国のキリスト教は19世紀に、それまでのニューイングランドを中心とするピューリタニズムから西部開拓の中で培われた福音主義に移行し、それが現代に至るまでのキリスト教の枠組みとなったとされている(Ahlstrom, Hofstadter, Noll)。したがって、現代のアメリカの宗教について考える際に19世紀に遡ってみることは、現代の状況の深層に迫るひとつの筋道であると言える。そこで本報告では、当時の文学作品を事例として取り上げ、当時の人々が「宗教」や「保守」についてどのように考えていたかを検討する。

文学の重要な仕掛けのひとつに時間の操作がある。例えばSF小説でしばしば使われるタイム・マシーン。これに乗って未来や過去に飛ぶことで、現代の科学技術のみならず社会や文化の制度や価値観の保守性を浮かび上がらせる。マーク・トウェインには『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』(1889)というSF小説があるが、この仕掛けは登場人物が時空を旅することこそ無いものの同じくトウェインの『ハックルベリー・フィン

の冒険』(1884)においても使われている。奴隷制度の廃止された南北戦争後の読者に向けて書かれたこの小説は、舞台を奴隷制度が前提となっていた19世紀前半の南部に設定することで、人々が執着する制度や価値観を古臭くなるものとして相対化してみせる。

こうした仕掛けを設えられた『ハックルベリー・フィンの冒険』には、一方で宗教小説と言ってよいほど様々な宗教とその信仰が描かれている。主人公ハックの会う大人達の大部分は敬虔なキリスト教徒であり、彼もキリスト教徒としての教育を受ける。その一方で、spiritに対する信仰をハックも含めた登場人物達が持ち合わせてもいる。こうした人々の心の「古臭くなったもの」としての描かれ方に、当時の東部知識人の宗教保守に対する批判と判断の迷いを見ることができる。

不寛容の論理——保守源流の再考

森本あんり (国際基督教大学)

「アメリカと宗教」というテーマで論じられることと言えば、ひところはブッシュとネオコンの話ばかりであった。彼らに代表されるアメリカの保守的キリスト教がいかに狭量で危険で困ったものであるかを論ずるには、特に洞察力が必要というわけではない。

本報告では、少し今日の舞台を離れて17世紀あたりまで歴史を遡り、コトンやウィリアムズらの発言を検証

することで、形成期にある社会が政治と宗教の交錯をどのような理論と実践で切り拓いていったのかを探りたい。というのも、近年の初期アメリカ研究においては、正統と異端、寛容と不寛容、保守と革新といった組み合わせが従来想定されてきたホイッグ史観のような順当さではけっして評価できない複雑さをもっている、ということが明らかにされつつあるからである。その中で、現代社会のほとんど疑われざる普遍的前提とされているリベラリズムや、その中核的な信仰箇条である寛容という価値についても、理念と実際におけるより即事的な再評価への方途が開けるかもしれない。

とはいえ、「源流を辿る」などという企ては、歴史学的にはどうしても曖昧でときに強引なこじつけにも堕しかねない作業である。それゆえ本報告では、現代アメリカの宗教的保守主義が直接こうした思想的系譜の嫡出子である、と論ずるつもりはない。ただ、自由主義と寛容、保守主義と不寛容、という二重の結びつきが、一見誰の目にも明らかなように見えて実はけっして自明ではない、ということは示せるのではないかと思う。寛容の論理には多くの綻びや捻れが内在しており、逆に不寛容の論理にもそれなりに理解可能な筋が通っているということがわかれば、単に不可解な相手を非難したり呆れかえったりする(それも実にもっともなことなのだが)だけでない何ごとかが、われわれにも可能であるということになろう。

第3日 2006年6月11日(日)

部会 A 「連邦主義の現在」

(9時～11時30分
司会 岩野一郎(南山大学)
コメント 有賀 貞(聖学院大学))

アメリカ型福祉国家と連邦主義

西山隆行(甲南大学)

連邦主義は、アメリカの福祉国家を理解する上で不可欠なキーワードである。クリントン政権期に実現した社会福祉改革に至る過程においても、連邦主義は、改革を正当化するためのレトリックとして頻りに利用されていた。アメリカの州・地方政府は、通貨を発行することができず、企業や富裕層などの高額納税者を確保できる保障もないことから、制度的には所得の再分配政策を採用しにくい。にもかかわらず、アメリカの福祉国家の枠組みにおいては、州政府や地方政府が福祉政策の主要な担い手にならねばならない。それ故、このようなディレンマに直面している州や地方政府が福祉改革を先導するという興味深い現象が見られたのである。

本報告は、連邦主義をめぐるいくつかの重要論点をアメリカの福祉国家の展開の中に位置づけて検討することを通して、連邦主義の意味や機能について考え直す機会としたい。

アメリカの福祉改革と分権システム

根岸毅宏(國學院大学)・渋谷博史(東京大学)

1990年代アメリカの福祉改革では、従来は「アメリカの福祉の罫」の典型例として取り上げられることが多かった AFDC(被扶養児童家族扶助)が、「福祉依存症」からの脱却を意図して就労を支援する方向を強化した TANF(貧困家族一時扶助)に再編された。州・地方財政の側面から見ると、AFDCの特定補助金から TANFの包括補助金への転換であり、それに伴って、連邦政府側の義務の程度が限定されるのに対応して、州政府側における自主性と裁量性が増した。

この福祉改革の内容はわかりやすく、第1に福祉受給者にとってのメリットとして、「福祉の罫からの救出」という論理があり、第2に納税者にとっても租税資金の使い方として「効率的かつ確かな福祉政策」というキーワードである。すなわち、「福祉の罫から救出」して市

場に復帰させるための就労促進的な施策を、州・地方レベルが自主性を発揮して「効率的かつ適格」に実施することで、「小さな政府」を実現するというのである。

貧困は、単に貧乏だから困るというのではない。経済社会の大きな流れにうまく乗れないことが、いわゆる「社会的排除」を生み出す。特に20世紀の重厚長大型産業を軸とする社会編成から、21世紀型の編成への大きな転換期であった1990年代に、その転換に乗り遅れる人々の不幸せを最小化するための福祉国家の再編という視点から、貧困や貧困対策としての福祉国家を捉えなおす時期にあると思われる。就労促進というアメリカ本来の自由主義の方向が強く復活する現象を、「納税者の論理」という費用負担の面からだけでは説明できない。アメリカ経済社会の全体において、産業構造や就労形態が大きく変化したことに対応して、家族のあり方も変化が強いられたはずであり、そのことが、福祉国家の再編を求めるベクトルの大きな要因となったと考える。

レーンキスト・コートの連邦制法理

会 沢 恒(北海道大学)

2005年まで続いたレーンキスト・コートは連邦制にかかわる事件について積極的に判断を下した裁判所として知られる。本報告は、この時期における立法権限の垂直的配分についての合衆国憲法(等)の解釈に関する代表的ないし特徴的な連邦最高裁判例を取り上げて検討を加える。連邦議会の立法を制約する憲法上の回路にはいくつかありえるが、第一に、議会の立法権限に関しては、ニューディール期の憲法革命以降、重要な役割を果たしてきている州際通商条項に基づく立法に一定の歯止めがあることを確認したことが特に注目される。第二に、第11修正によって州を対象とする立法については限定が加えられているもののこれは絶対的なものではなく、それを回避または乗り越えて連邦議会が立法を行うことができる場合があり、これに関連して特に第14修正5節の解釈を焦点として新たな展開が見られることを示す。以上の局面では最高裁が連邦立法に対して規制を加える側面が注目されるが、しかしながら第三に、連邦立法と

州法の競合ないし前者による後者の専占の場面においては、最高裁は必ずしも連邦立法に対して制限的であるとは言えず、むしろ州法を限定する方向で連邦立法を解釈する事例も見られることを指摘する。以上の作業を通じ

て、レーンキスト・コートがニューディール期以降の拡大した連邦政府の役割を認識しつつも、連邦憲法の「制限された政府」という理念を確保することに努めようとしたことを確認したい。

部会 B 「ラティノ研究と『境界』—四つの異なるアプローチ」

(9時～11時30分
司会 庄司啓一(城西大学))

交差路のラティノ／ナ(史)研究——移り変わるフレームワーク、合流するパースペクティヴ

村田 勝幸(北海道大学)

ラティノ／ナ(史)研究の重要性が語られるとき、その根拠としてしばしばもちだされるのは、ラティノ／ナ住民のアメリカ社会における急速な顕在化である。2000年センサスでかれらが「最大のマイノリティ集団」になったという事実、あるいはその事実への反響の大きさは、数的プレゼンスが重要性の核にあることをたしかに傍証している。だが、ラティノ／ナの「最大のマイノリティ集団」化が21世紀のもっと遅い時点で起こるものと予測されていたとはいえ、かれらの急増はすでに1970年代後半には話題にのぼり始めていたし、南カリフォルニアなどでは早くも1990年代に白人住民数を凌駕していた都市もあった。そこで私は、ラティノ／ナ(史)を研究対象とする者の一人として、「では、なぜラティノ／ナ(史)研究への(少なくとも日本における)注目が一般的な傾向として立ち後れたのか」との自己批判を込めた問いから検討を始めたい。その「原因」、さらには「影響」を考察することではじめて、ラティノ／ナ(史)研究を「ラティノ／ナの歴史についての研究」というように対象(ないしアプローチ)を「ゲッター化」することなく、ラティノ／ナの歴史をめぐる研究を通して、その成果をそれ以外の対象領域の研究に対しても開くことができるようになるのではなからうか。歴史研究者としての発言を求められている本報告においては、まず以上の点に簡単に触れたあと、近年アメリカで発表されたラティノ／ナ(史)に関する実証研究をいくつかとりあげ、おもに理論的な成果という観点から分析を加えたい。そのさい、そうした研究のそれぞれが、研究史上の流れのどこに位置し、先行する研究の何を批判(ないし継承)しているのか、あるいは、直接的にはラティノ／ナ(史)を対象としていない研究と問題設定や理論的枠組みの面ではいかなる点を共有しているのか、等にも注目したい。

文化ナショナリズムとトランスナショナル共同体——メキシコ系アメリカ人とメキシコ人のアメリカ対策

黒田 悦子(国立民族学博物館名誉教授)

米国—メキシコ二国間関係を決定づける歴史的出来事は、1) 1848年のグアダループ・イダルゴ条約の結果、メキシコ系の市民が発生したこと、2) 1960年代、メキシコ系アメリカ人が復権運動を起こしたこと、3) 1994年発効の北米自由貿易協定(NAFTA)以降、メキシコの北の大国への経済依存がより高まったことである。この流れの延長線上に、21世紀のメキシコ系とメキシコ人のアメリカ対策が読みとれる。

メキシコ系アメリカ人は1960年代の戦闘的な遠距離ナショナリズム(その極みはアストラン Aztlán 思考、南西部諸州はアステカの起源地だったという考え)を克服して、自らの位置付けをネパントラ(nepantla 中間の地)や国境地帯(border)からトランスナショナル文化共同体を示唆する拡大メキシコ(Greater Mexico)へと転換しつつあり、メキシコ文化の維持とチカノ文学・芸術の展開に努めている。

一方、メキシコ側の移民依存は、1980—1990年代の新自由主義経済政策下、南部の先住民地域にまで及んだ。集団で短期間、カリフォルニアの農園で働く場合も多いが、故郷の村と米国の居住地を移民が頻繁に往来し、村人と移民が相互に依存するトランスナショナルな生活が増えてきた。例えば、オアハカ州ミシュテカ低地の村々はニューヨークへ移民を送ると、移民は相互扶助組織をつくり都市の居住地(Sunset Park, Brooklyn が中心)で村の儀礼・祭りをを行い、メキシコの家族へ国際送金し、村役場へも寄付し行政に影響を与える。またカリフォルニアでは、オアハカ州からの移民がNPO(FIOB, FOCO ICA, ミシュテカ・サポテカ二民族が中心)を創り、万霊節、ゲラゲッツェなどの祝祭を開催して同州人の生存を容易にし、本国のオアハカ市にはNPOの支局を置き地元と連繋をはかる。

メキシコがアメリカから学ぶことは多い。一方、アメリカでは、メキシコ系人口の増加と文化力はこの国のラ

ティノ化の大きな要因になるだろう。

“ラティーノ”とはいかなる人々か——呼称の変遷にみるエスニシティと政治性

牛田千鶴（南山大学）

いまや米国最大のマイノリティとなった「ラティーノ (latino)」と呼ばれる人々は、いったいどのようなルーツを持ち、どのような経緯を経て米国内に移り住むようになった人々なのであるか。「ラティーノ」とは、「ラテン系」をさすスペイン語である。

人種ではなくエスニシティに基づく呼称であるため、「ラティーノ」と呼ばれる、あるいは自らを「ラティーノ」と呼ぶ人々の中には、白人・黒人・黄色人種、そして複数の人種の血を引く混血の人々が幅広く含まれている。では、彼らの帰属を決定づける要因としてのエスニシティとは、いかなるものなのであるか。

「ラティーノ」と併用される呼称に「ヒスパニック (hispanic)」があるが、公的機関やマスメディアなどにより客観的呼称として用いられる場合は、ほぼ同一の集団として扱われる。しかし、当事者や研究者の多くは両者の違いを明確に認識し、エスニシティあるいはエスニック・アイデンティティを根拠として、ふたつの呼称を使い分けてきた。

このほかメキシコ系米国人に関しては、「チカーノ (chicano)」という呼称も多用される。スペイン語でメキシコ人を指す「メヒカーノ (mexicano)」がなまり、かつてはメキシコ系アメリカ人に対する蔑称として用いられていた「チカーノ」であったが、1960年代後半に展開されたチカーノ運動の過程で、被差別者としての自己に内在する否定的意識を払拭し、自身のルーツや生い立ちに誇りを甦らせる呼称として広く受け入れられるようになっていった。

本報告では、ラティーノをめぐる様々な呼称に関し、その呼称が用いられるようになった歴史的背景やそれぞ

れの概念の相違などについて、今一度確認しておきたいと考える。

バリオの文学

越川芳明（明治大学）

アメリカ合衆国南西部のメキシコ系の「バリオの文学」（とくに女性詩）を取りあげる。「バリオの文学」では、様々な「ボーダー表象」が使われる。国境警備隊（ラ・ミグラ）やメキシコ違法移民（コヨーテとポヨ）、麻薬密輸、保護関税工場群（マキラドーラ）、グラダルーベの聖母、ラ・ジョローナ、マリンチェ、フリーダ・カローロなど……。

それらの「ボーダー表象」には、アングロ白人 VS 混血（メスチーソ）、プロテスタント文化 VS カトリック文化、経済先進国（第一世界的）VS 後進国（第三世界的）、民族的、宗教的、経済的な差異や格差が複雑に絡み合って投影されている。

そこで、それらの「ボーダー表象」を詳細に見ながら、次のような観点から論じる。①多重のハンデキャップ。メキシコ系の女性たちは民族的、階級的、宗教的、性的な抑圧を受ける。②多重的なテーマ。個人的経験の上に歴史的テーマ（アストラン信仰）、政治・社会的テーマ（マリノリティ、労働者階級）、民族的テーマ（反人種差別）、宗教的テーマ（カトリシズムへの批評）などを重ね合わせる。③多民族共存的・多言語主義的イデオロギー。WASPのイデオロギー「単一言語（英語）教育」と対立する。④米国主導の経済グローバルゼーションに対する批評性。

ともすればステレオタイプに陥りやすい「ボーダー表象」が、ジェンダー偏差の光を当てられることによって、どのような詩的パワーを発揮しているかを考察することが主眼になる。

Workshop A “Relocating ‘America’ in American Studies”

(9時~11時30分
Chair Julie Higashi (Ritsumeikan University))

Disrupting Location

Sheila Hones (University of Tokyo)

This paper engages with the workshop’s theme, “Relocating ‘America’ in American Studies,” from a cautious distance, suggesting that before diving into the workshop’s question of whether or not “‘America’ and ‘American’ topics are situated definitively in North America” we might step back for a moment and consider the ways in which the workshop’s theme in general, and this question in particular, depend upon a specific way of looking at global space. The paper proposes that instead of asking the theoretically loaded question ‘where is the subject located?’ Americanists might usefully ask instead ‘how can we spatialize this subject?’ or ‘what kinds of knowledge about this subject will different concepts of space make possible?’

Arguing that locating events and themes inside a ‘container-space’ of fixed distances and clear borders is only one of the many spatialization strategies available to Americanists, this paper lays out several ways of seeing space other than in the absolute, quantifiable, and territorial terms made familiar to us, for example, through geopolitical map projections. It then asks what kinds of American studies work, or knowledge production, each of these alternatives enables or prioritizes and what, in contrast, each tends to disable or discount.

The paper relies on recent work in geographical theory not only for its interest in the ontology of space but also for its belief in the value of identifying what becomes included and what becomes occluded in different definitions and performances of geographical knowledge. As alternatives to geographies of absolute and geopolitical space, the paper suggests ways of seeing space in relational and ontogenetic terms. It then offers several concrete examples of how these different conceptualizations of space might usefully be applied to American studies work. Having separated out these various alternatives, however, the paper concludes by arguing that the most productive way to deal with an expanded spatial repertoire is not to view different definitions of space as mutually exclusive but to try to understand the ways in which they function in the lived world in mutual

tension.

Connecting Pasts: Transnational and Imperial U. S. Histories

Paul Kramer (Johns Hopkins University)

In 1900, William Howard Taft, Civil Governor of the Philippines, had a surprising encounter near the town of Antique. As the brutal Philippine-American War raged, Taft was traveling through the Islands’ provinces inaugurating local governments, building ties to elites of the *principalia* and assisting the fragile fiction of pacification. As they entered the public square, he and his party were somewhat alarmed to come across the Goddess of Liberty “presumably enlightening the world with a torch that looked like a big club.” Built by local elites, this improvised Statue of Liberty had originally been a saint “brought from an interior town and dressed up in secular garments for the occasion, including an American flag.” Taft was uncomfortable with this transplanted symbol of freedom and delivered an impromptu lecture to his Filipino hosts to the effect that liberty was a force much misunderstood; “its true meaning was life under the government organized to secure such liberty to the individual as well as consistent with law and order.”

How are American Studies scholars to make critical sense of such a moment? My paper will approach this question by looking at two modes of emerging inquiry which attempt to internationalize American Studies, but which do so in ways that mirror and, to some extent, contradict each other. In broad terms, the first of these involves the study of cultures of United States imperialism. The strength of this approach is its attention to questions of power, its elaboration of American perceptions of the world beyond U. S. national borders, and its attention to connections between U. S. imperialism and the politics of difference, especially in terms of race and gender. But this approach also tends to emphasize the voices of U. S. actors over those subjected to U. S. power; it often describes power in terms of coercion and imposition; it depicts encounters in terms of the projection or export abroad of U. S. formations against an emptied background. The second

set of approaches fall under the rubric of transnationalism. Its advantage is its emphasis on the flow and movement of people, goods, ideas and institutions across U. S. national borders and the successful appropriation and deployment of U. S. cultural forms by non-U. S. actors for their own purposes. But this approach tends to efface questions of hierarchy; transborder movement is often conceived of as inherently emancipatory; cultural appropriation is not tainted by questions of hegemony. My paper will not try to resolve the productive tension between these two frameworks but to use concrete examples from my own research on Philippine-American colonial history, like the one above, to describe ways each might inform and enrich the other. Transnationalism may help describe more contingent imperial formations in which non-U. S. actors played crucial and semi-autonomous mediating roles; imperialism may widen the topics of transnationalism to include less emancipatory subjects, like war and empire-building, and also lend a sense of gradients and limitations to the study of transborder flows. Put in dialogue, studies of imperialism and transnationalism promise to yield new analytical vocabularies for discussing power, agency and mutual transformation in U. S. interactions with the broader world.

American Sports as an Invisible yet International Field of Inquiry

Kohei Kawashima (Musashi University)

As a topic of research, sports are remarkably invisible in the Japanese Americanist investigation into the culture, society and history of the United States. There are, of course, several works in Japanese that merit scholarly attention, some of which should deserve much acclaim. Viewed as a whole, however, our interest in, and commitment to this topic unfortunately remain at a level that is utterly incongruous with the significance of athleticism in both domestic and international contexts. It can be fairly claimed that American sports serve as a fruitful case study in which one form of American culture has interacted with foreign others in the drastically internationalized world of the twenty-first century.

In a recent bibliographical review, two authors argue that sport studies are not integrated into the mainstream of American sociological thought and institution. It is true that such academic communities as NASSH and NASSS have engaged themselves in active and productive scholarship, but the reviewers are right in their observation that

presentations and sessions on sports are rarities in the annual conferences of large-scale academic associations. Turning to the Japanese scene, we find equally productive scholarship by communities of experts in sports history and sociology, but an interesting parallel can be drawn here. Sports tend to be neglected in large-scale associations. In the case of our JAAS, for example, American sports still remain marginal to our intellectual pursuit. It is true that we did take up sports and explore its history, but compared with its importance in American culture and society, our efforts have been nothing but insufficient. We should reconsider the weight of the whole phenomenon, institution, and culture of American sports, reexamine our research agenda and goals in the past, and initiate a new inquiry into this topic.

As possible starting points for such an inquiry, this presentation suggests two areas of investigation. The first is concerned with the degree by which each game of American sports is internationalized. Just take examples of three major high-profile sports, basketball, baseball, and American football, which have been globalized by different degrees in different ways. Each of these games may well represent or symbolize different aspects or elements of American culture in their processes of globalization, and foreigners' perceptions of these aspects and elements may explain, at least partially, why some are better accepted, and hence more internationalized, than others. The second area of interest deals with the degree by which racial/ethnic minorities participate in each game. Take the example of African Americans, who have participated in the three high-profile sports in different degrees. Basketball, especially its professional version, is well known as a predominantly African-American sport, in which around four-fifth of the players are African Americans. On the other hand, baseball tends to be viewed (and expected) as a white sport. American football can fit in the middle, in which 50-60% of the players are African Americans. Based on these observations, several questions can be asked, of which the most fundamental is: what accounts for these differences? Can the trends in racial/ethnic minorities' participation be a factor in encouraging or discouraging internationalization?

American sports are a field rich with insight and perspective into American culture in the global context. As an association of Japanese Americanists, the JAAS should assume its fair share of responsibility in investigating this intriguing area of American experience.

部会 C “New Orleans”

(14 時 10 分～16 時 40 分
Chair Kazuko Ota (Kyoritsu Women’s University)
Comments Julia Leyda (Sophia University)

Extraordinary Disaster, but not an Isolated Case: Hurricane Katrina, Environmental Protection and New Orleans

Yayoi Haraguchi (Ibaraki University)

Hurricane Katrina hit New Orleans and its surrounding areas of southern Louisiana on August 29, 2005. Most of New Orleans areas had been severely devastated by flooding water for months. Damages caused by Katrina were unprecedented, regarding economic, environment, and human lives. At the aftermath of Katrina, recovery of oil-related facilities was one of the focal points, since the Gulf Coast is the area where the oil and petrochemical industry have been heavily located.

Katrina demonstrated that the Gulf Coast area has underpinned the America’s economy at all costs. Coastal wetland, which absorbs the power of hurricane surge, has been tremendously destructed for oil drilling and the construction of navigation channel for the large vessel. We review here the Mississippi River Gulf Outlet project as an example of wetland developments which have brought enormous impacts on ecosystems in the region.

Also, environmental justice issues have risen in the process of reconstruction in New Orleans. Southern Louisiana has been one of central bases for environmental justice movements in the United States for years. I would like to point out what environmental justice issues have been raised before and after Hurricane Katrina in New Orleans and its surrounding areas.

Hurricane Katrina and Wikipedia:

The Use of Next Generation Information and Communication Technologies in Epic Disasters

Naohito Okude (Keio University)

The use of Web 2.0, the new web communication technologies, changed the notion of help in times of disaster. Web 2.0 is a second generation of services available on the World Wide Web and people are able to collaborate, and share information online. There are several Web 2.0 tools such as Wiki, Google Map, Google Earth and Flickr.

Using them people collaborated on a master disaster database for Hurricane Katrina survivors, aggregating from web resources to provide a centralized website to help families locate their members and provide important news and information.

People collaborated to create the master database through the open, free Internet encyclopedia-Wikipedia. Many would enter the data in their web and blog sites and make them searchable. Wikipedia collected information from all the other web pages, aggregating the data on a single page, which became an initial departure point for those who need information. This was massive collaboration. (See <http://katrinahelp.info/wiki/main.html>)

People also created a visual understanding of what was happening to New Orleans using Google Map, Google Earth and Fliker. On Tuesday, August 30, 2005, Kathryn Cramer put her short article “New Orleans Levee Break(s) Before and After” on her blog site. Many who “don’t know each other and have never met,” posted more information and the article expanded its size quickly and became an impressive explanation of the disaster. (see http://www.kathryncramer.com/photos/new_orleans_flooding/index.html)

Hurricane Katrina and Its Impact on the Political Discourse in the United States

Toshihiro Nakayama (Tsuda College)

On September 15th, few weeks after Hurricane Katrina hit New Orleans, President George W. Bush made a strong commitment in his address to the nation in New Orleans that the federal government would do its utmost for the recovery of the Crescent City. The initial response by the Republican Congressional leadership was that they would stand firm behind President’s words. However, soon after, the ‘budget hawks’ within the Republican Party, namely, the Republican Study Committee (RSC), started to voice concern about the growing size of the federal budget. Since September 11th, budget hawks remained relatively silent because they’ve understood the new national security needs. However, there were always suspicions among the small-government conservatives that this White House

embraces a different version of conservatism; a big-government conservatism. Politically, it was difficult for them to criticize the growth of the national security related budget because of the new political environment after September 11th. However, the small government conservatives did not remain silent on whether or not to increase federal spending to pay for the Katrina relief. This

bitter divide within the GOP was only one of the contradictions that manifested itself in the debate since Katrina hit New Orleans. Since then, voice of concern towards the Bush administration among the conservatives has grown louder. This presentation will explore how Katrina affected the political discourse in the United States with a specific focus on the growing divide within the GOP.

部会 D 「サリンジャーと戦後アメリカ」

(14時10分～16時40分
司会・報告 田中啓史(青山学院大学))

『ライ麦畑でつかまえて』と映画

田中啓史(青山学院大学)

サリンジャーは幼いころから映画に興味があり、映画界で活躍することを夢みていた時期もあったらしい。今回はサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』発表以後のアメリカ映画について考えてみたい。1951年に発表されたこの小説は、主人公の「当時としては」大胆な言動が物議をかもしましたが、赤狩り旋風で硬直化していた戦後アメリカの言論・文化界に風穴をあけたとは言えるだろう。映画界をみると、それ以後若者の反抗を扱ったものが目立ってくる。55年に「暴力教室」やジェイムス・ディーンの「理由なき反抗」、56年に「お茶と同情」、57年にはプレスリーの「監獄ロック」、そして61年に「ウェストサイド物語」と続く。

ここではその中から、「お茶と同情」と「ウェストサイド物語」に注目したい。「お茶と同情」は「エデンの東」や「理由なき反抗」で注目されたエリア・カザンが演出してロングランとなったブロードウェイの舞台劇を映画化したものだが、高校の寄宿舎を舞台にして若者の反抗を描いていることなど『ライ麦畑』との共通点が多い。「ウェストサイド物語」はストーリー、音楽、作詞、振り付けなど4人のコンビが作ったが、4人ともユダヤ系であり、政治的にも当時の政府当局から問題人物としてCIAやFBIからマークされていた。このことが「ウェストサイド物語」の内容にも影響を与えている。このような映画作品と当時の時代状況との関わりを考えてみたい。

戦争体験と『ライ麦畑でつかまえて』

井上謙治(明治大学名誉教授・桜美林大学名誉教授)

J・D・サリンジャーの長編『ライ麦畑でつかまえて』

(1951)は出版されるとベストセラーになったが、戦後文学の傑作として評価されるようになったのは、大衆文化が進み、順応の時代と呼ばれた1950年代半ばである。しかし、サリンジャーがこの小説を書いたのは、それ以前、社会的・文化的状況も異なる1940年代である。当時の文学状況は戦争が重要な文学的テーマであり、サリンジャーと同世代の作家たちの戦争小説、『裸者と死者』、『若き獅子たち』、『ケイン号の反乱』、『地上より永遠に』は、いずれもベストセラーになっている。しかし、サリンジャーはノルマンディー上陸作戦以来、戦闘疲労症になるほど、過酷な体験をしているが、戦争や軍隊組織を題材にした長編小説を書くことがなかった。この点について、戦時中、サリンジャーが書いた文章の中で、みずから「歴戦の、注意深い観察者」と述べ、さらに「戦争についての小説」と「戦争小説」を区別し、最良の戦争小説として、ウィリアム・マクスウェルの長編小説『若葉』(*The Folded Leaves* 1945)を挙げているのは、ひじょうに示唆的である。『ライ麦畑でつかまえて』は興行きが深く、多くの研究、評論が示しているように、さまざまな読み方が可能であるが、書かれた時期が戦争の記憶がまだ生々しい1940年代であることを考えると、サリンジャーの「戦争小説」であり、不安、懐疑に苦しみ、「救い」を模索する大人の小説だといえるだろう。

サリンジャーの描く女性たち

高橋美穂子(群馬県立女子大学)

サリンジャーは女性たちを描くときも男性たち同様、風俗的な側面を魅力的に描きながら、その下にある魂のありように常に視線を向けている。彼はこれまで、さまざまな女性たちを描いてきたが、多くはニューヨークやその近郊に居住する白人の中流上層階級の女性たちである。その中から戦後の1948年、1949年に発表された作品から、3人の女性、Muriel, Eloise, Boo Booをと

あげる。「戦後アメリカ」をキーワードにして彼女たちに焦点を当てた場合、何が見えてくるだろうか。

Murielは“A Perfect Day for Bananafish”において、戦後アメリカの豊かな消費生活を享受する女性として登場する。そのファッショナブルな姿は『ニューヨーカー』誌の広告写真しながら読者を楽しませる。だが、彼女の内実はどのようなものなのだろうか。

“Uncle Wiggily in Connecticut”の主人公 Eloise は裕福な郊外生活を送る子持ちの主婦である。物質的には恵まれているが、精神的には満たされていない。その苦悩は Betty Freidan が *The Feminine Mystique* (1963) において「名前のない問題」と名づけた白人中産階級の専業主婦の空虚感と相通じる。

“Down at the Dinghy”でさっそうと登場する Boo Boo は鋭敏な感受性をそなえ、表層にとらわれずに事物の奥にある本質を見抜く目をそなえた人物であり、サリンジャーの理想の人間像の一人として造形されている。4歳の息子との会話によってユダヤ人蔑視の問題が浮上するが、それに対する彼女の意見、「それは最悪のことではない」(“That isn't the *worst* that could happen.”)は作家サリンジャーのものでもあるようだ。

人種とイノセンスとポピュラリティ

三浦 玲一 (一橋大学)

ひとつめの軸は、いわゆる「ユダヤ系の文学」からは

じまり、いわゆる「多文化主義」の小説にいたった戦後アメリカ文学史のなかに *The Catcher in the Rye* をおいてみることである。二十世紀後半の合衆国の小説のトレンドが、じつに、人種概念とアイデンティティ概念に密接にむすびつかずには成立しなかったことを認めるとき、われわれは同時に、この小説には「人種」への言及がほぼまったくないということに気付くだろう。

その問題から次に、この小説を、Ernest Hemingway の *The Sun Also Rises* とくらべてみよう——ユダヤ人差別を、その小説の構造そのものと密接に関連させた「青春小説」と。この二つの作品は、多くの点で非常に良く似ている（一人称の語りによる、社会のアウトサイダーで「放浪」する青年の、性をおおきな問題とした小説であり、作者の戦争体験やアメリカ性といったテーマから語られることが多かった）。

たとえばエティエンヌ・バリバールは、人種差別をナショナリズム（の矛盾）がもたらす必然と論じているが、この小説は、人種差別なきナショナリズム（の不可能性）を描こうとした作品である。あるいは、人種を抹消したアイデンティティ・ポリティクスを。アイデンティティとは社会的な承認であり、この小説がイニシエーションの小説であるなら、そこに描かれているのは、人種なきアイデンティティの不可能性なのである。

主人公が想像できる成長とは、社会から排除されることでしかない。ユダヤ人という軸を仮構することで、そのことははっきりするであろう。

Workshop B “New Dynamics between the United States and the Asia/Pacific Community”

(14 時 10 分～16 時 40 分
Chair Yasuhiro Katagiri (Tokai University))

American Studies, Asia Pacific Studies, and Latin American Studies in the World System: Lessons from the History of Global Cinema

Curtis Marez (University of Southern California)

In order to understand the role of American Studies and other US exports in the world, particularly at the contemporary moment of US militarism and capitalist conquest, I would argue that critics must situate American Studies research, teaching, and institutions in relationship to a larger world system or global political economy. The central aim of this paper is to suggest the critical importance of attempting to triangulate American Studies, Latin American Studies, and Asia Pacific Studies. I focus on what I call the transpacific triangle, a critical map that articulates these three distinct yet related fields. One implication of this perspective is that American Studies, Latin American Studies, and Asia Pacific Studies, as well as their historic objects of study, are all part of a larger historical world system characterized by conflicts and continuities between nationalisms and transnational capitalism. As an example I will focus on the historic interrelations between Hollywood and Mexican and Chinese cinemas in the early twentieth century. In many ways, I argue, the history of film production and state policy in China and Mexico presupposed (explicitly or implicitly) anti-imperial perspectives that Hollywood recognized as serious challenge to its domination of the global market. Both China and Mexico represented significant markets for US films in the 1920s and 1930s, and official promotion of domestic production in both countries undermined Hollywood control. During the 1930s Hollywood trade journals often voiced such concerns. They reported, for instance, not only on censorship battles but also on the Mexican and Chinese governments subsidization of domestic film production, on the taxation of Hollywood films, and on quotas on foreign imports. Although by US standards the other industries were relatively small, they were nonetheless represented as posing serious threats to Hollywood hegemony since China and Mexico exported their films throughout Asia and Latin America respectively, as well as to immigrant communities in the US. US companies responded to such challenges by promoting films with Chinese and Mexican subjects. While

US viewers were the main target audience for such works, Hollywood producers nonetheless also made and distributed them in hopes of competing with Chinese and Mexican productions. In this context I will analyze several US films, many of them set on the US/Mexican border, involving conflicts between white Americans and Mexicans and Chinese immigrants. And finally I will conclude by reflecting upon the implications of my case studies for a contemporary version of the world system, the transpacific triangle, and the role of American Studies within it.

Manzanar Murakami and Kafka on the Shore: A Transnational Reading of Japanese/American War Memory in Novels by Karen Tei Yamashita and Murakami Haruki

Gayle Sato (Meiji University)

Yamashita's *Tropic of Orange* and Murakami's *Kafka on the Shore* [海辺のカフカ] are novels about the operations of war memory, both private and public, at the close of the 20th century. Manzanar Murakami, a character from *Tropic of Orange*, is a sansei man born in the Manzanar “Relocation” Camp in 1942. After many years as a practicing surgeon, he experiences a mental breakdown and joins the homeless community of Los Angeles, where he stands on freeway overpasses all day “conducting” the symphony he sees from this site of “critical relocation.” Kafka also undertakes a “critical relocation” of historical and personal memory. After running away from home on his fifteenth birthday to escape the father who inflicts an Oedipal curse on him and ostensibly to search for the mother who abandoned him when he was a young child, Kafka concludes his journey by entering a forest guarded by two soldiers who ran away from the Imperial Army and have been living there ever since. As this brief summary suggests, both Manzanar Murakami and Kafka are created as embodiments of arduous physical and psychic relocations to sites of “forgotten” violence from a silenced transnational history of the Asia Pacific War. A comparative reading of Manzanar and Kafka reveals the novels’ parallel indictments of the postwar myth of “peace through prosperity” that has enabled both the US and Japan to escape

accountability for many of the Asia Pacific War's major atrocities.

However, my main concern is not the manner in which Japanese/American literature reflects or corroborates the type of interventionist knowledge about the Asia Pacific War that is being actively recovered and documented by historians or workers in other disciplines. Rather, as a literary scholar, I would like to ask what is to be learned about war memory when it is expressed through a work of literature. Anne Anlin Cheng, in *The Melancholy of Race* (Oxford, 2001), distinguishes between "grief" and "grievance," explaining why a successful grievance procedure—for example, the passing of the Civil Liberties Act of 1988 in the US—may do nothing to get at the roots of the grief that is the psychological and often intangible and inexpressible yet profoundly disabling product of racism. Taking "grief" as a point of departure, I will compare and distinguish the situations of Manzanar Murakami and Kafka, the former as a female-authored minority subject remembering his own experience of the Asia Pacific War, the latter as a male-authored dominant subject of postmemory (which means he has inherited his war memories). Through a focus on their parallel forms of "self-imposed" homelessness, and their explicit and figurative positioning "on the shore" of their respective nation's psychic as well as physical borders within a transnational remembering of the Asia Pacific War, I will try to formulate some tentative answers to the question of what kind of knowledge is gained through a literary narrative's representation of war memory, and how a knowledge of grieving might open up different forms of grievance or activism appropriate to the 21st century.

Truth or Dare: The Changing Views on Opinion in News

Sung Hee Park (Ewha Woman's University)

The factual reporting and commentaries are two major components of establishing journalistic truth. An effort to separate facts from the opinion has been passed on as a professional discipline to insure objectivity of news, while an enduring emphasis on free expression of diverse opinion to secure the engine for freedom of press. The dynamics between the facts and opinion have been defined and redefined over a long history of humankind from Ancient Greece to modern America, thus yielding various approaches to journalistic truth. In Asian countries such as Korea, where the inception of journalism is non-egalitarian, opinion has been often incorporated into news. With the advent of Internet and thriving online media, the opinion

again drew public attention as a powerful agent for social movement, adding values to the notion of relative truth. This paper focuses on the area of opinion, and attempts to trace the paths through which the value of opinion is formed, changed, and reevaluated from different time and space.

The journey constitutes three major parts. First, the paper will walk along the road of Ancient Greece to probe the initial attempts to harness opinion as an integral part of pursuing the truth. How the early philosophers, or sophists at that time, acknowledged this power of words and expression of thoughts will be looked into. Opinion then was a vase for truth and politics, not a desecrated obstacle. The second part of the paper will discuss the process by which the marriage between facts and opinion gradually dissolved for wider readership and objective reporting. The venue for this discussion will be Progressive Era in the United States.

The main part of this journey, and the third part of this paper, focuses on the latest development in journalism both in the United States and in Korea. In the United States, there is an increasing awareness that a big issue in journalism today is the level of subjectivity that creeps onto the page, the concern that the distinction between news and opinion has become increasingly hard to make. With this in one hand, another group argue that opinion in the news is important for healthy democracy and now is the time to promote the opinion to prevent political apathy. The proponents of opinion argue that simple facts are overly fed to today's society by public relations practitioners, advertisers, and various technologically advanced channels. It is, according to them, opinion that is at stake and much in need for public debate. On the other side of hemisphere, journalists as well as readers have raised self-reflective criticisms about non separation of facts and opinion, while facing much harsh reality of inundated opinion in cyberspace. The attitude toward opinion in Korea is double-binding, and people in Korea realize the topic of unleashed opinion is relevant now than any other period in history of Korea, and especially with the help of Internet, opinions are almost impossible to ignore, let alone to tame or separate from fact.

With its comparative perspective in cross-cultural context, the paper aims to shed light on the blurring distinction between facts and opinion, and what it signifies for the enduring pursuit of truth. The paper carefully speculates that the Ancient Greek notion of relative truth might be revisited in 21st Century.

第40回年次大会 分科会のご案内 ()は責任者および連絡先

[]内は教室番号です。

1. アメリカ政治 (大津留(北川)智恵子・関西大学) <ckotsuru@ipcku.kansai-u.ac.jp> [HB1]

テーマ:「司法と政治」

W・ブッシュ政権下で最高裁長官と判事が任命され、アメリカの司法は保守色を強めている。キリスト教保守派が政治化して以来、宗教的価値にかかわる問題が司法を巻き込みながら論じられてきた。9.11以後は、愛国法の制定・実施と延長問題、司法省、国土安全省による行政権限の拡大、さらには捜査令状なしの盗聴問題など、アメリカ社会での市民的自由に関わる問題が立て続けに生じ、司法の果たすべき役割をとらえる必要性も大きくなっている。アメリカ政治の研究の中で司法の役割をどのように捉えるべきかをめぐり、報告者の問題提起を手がかりとしながら、参加者全員で自由に議論を展開したいと思う。

報告者:大沢秀介(慶応義塾大学)

司会:大津留(北川)智恵子(関西大学)

2. 冷戦史研究 (菅英輝・西南女学院大学) <kan@seinan-jo.ac.jp> [HB2]

新資料の発見を追うだけでは、研究の真の発展は期待薄である。研究者には、先行研究と絶えず向き合うことによって、それをどう乗り越えるかが問われている。そういう問題意識から、今回の分科会では、冷戦史の研究動向を取り上げることにした。高田会員には、最近の冷戦史研究の動向を踏まえて、冷戦史研究の課題を中心に報告してもらう。松村会員には、中国内戦と米ソ冷戦との関係を中心に研究動向の整理をする中で、アジアの冷戦をどう捉えなおそうとしているのかについて報告してもらう。

報告者および報告テーマ

(1) 松村史紀(早稲田大学現代政治経済研究所助手)

「アジア冷戦史の研究動向:戦後中国内戦と米ソ冷戦を中心に」

(2) 高田馨里(都留文科大学非常勤講師)

「冷戦史研究の現在:研究動向の整理を中心に」

3. 日米関係 (川上高司・拓殖大学) <tkawakam@ner.takushoku-u.ac.jp> [HB3]

本年度は「米国の戦略文化」をテーマにそれが日米関係にどう影響を及ぼすかを議論する。本分科会ではまず、ブッシュ政権2期目の傾向である「The New American Militarism」を分析し、その根底にあるアメリカの戦略文化を論じる。その後、アメリカの政軍関係の傾向とそれがどのように日本に影響を及ぼしているかを論じ、そしてそのアメリカの戦略が日米関係にどのようなインパクトを与えるのかを議論する。

報告者:川上高司(拓殖大学)「アメリカの戦略文化—新軍国主義の根底にあるもの」

八木直人(世界平和研究所)「アメリカの政軍関係と日本への影響」

田中康友(北陸大学)「米国の戦略と日米関係」

4. 経済・経済史 (加藤一誠・日本大学) <k-kato@eco.nihon-u.ac.jp> [H11]

名和洋人氏(京都大学大学院経済学研究科博士課程)に「戦間期における水資源開発政策の展開—連邦政府内務省の開墾事業を中心に—」として、次の内容で報告して頂きます。

内務省の開墾事業は、西部乾燥地域での灌漑用水供給を主たる目的として1902年に開始されたが、戦間期には電力供給、都市用水供給、洪水制御等の目的も重視されるようになり、その政策実態は大きく変化した。本報告ではこうした変化とこれを促した要因について検討する。

報告者 名和洋人(京都大学大学院経済学研究科博士課程)

タイトル 「戦間期における水資源開発政策の展開—連邦政府内務省の開墾事業を中心に」

5. アジア系アメリカ人研究 (糸井輝子・白百合女子大学) <kumeit@shirayuri.ac.jp> [H12]

近年の研究動向を踏まえ、今後の展望と課題を考える。まず小澤智子会員(白百合女子大学・非)が「移民・日系人と国際関係」と題して、近年の研究が、日米両国の移民をめぐる外交史から、国家・国民の概念や文化・経済交流など、多岐に展開していることを具体的事例から論じ、今後の方向性を探る。続いて、山口知子会員(関西学院大学・非)が「エスニシティ論から異文化表象へ」と題して、アジア系作品が「自分たち」を語るエスニシティの枠を超えて、アジア的な異文化を描く傾向にあり、この傾向が新たなエスニシティの「創造」へとつながっているのではないかと、具体的な作品分析から論じる。

報告

小澤智子(白百合女子大学・非)「移民・日系人と国際関係 近年の研究動向と展望」

6. 移民・エスニシティ（山田史郎・同志社大学）<syamada@mail.doshisha.ac.jp> [H22]

藤川隆男編『白人とは何か？ ホワイトネス・スタディーズ入門』（刀水書房，2005年）をとりあげて，今年度の分科会を開きます。同書は，白人研究の概念と方法から，西洋主要諸国はもとより日本・サモア・アフリカ・アラブをも射程に入れて，近代世界における白人と白人性を歴史的，構造的に提示することを主眼として編まれました。私たちアメリカ研究者にとりましては，いわゆるアメリカ研究に関係する部分は多くありませんが，むしろアメリカ合衆国以外の国や地域における白人の形成や，非白人世界における白人に関する論考から貴重な示唆を受けることが多いのではないのでしょうか。分科会では，編者の藤川隆男さん（大阪大学）をお招きして，白人研究の意味と問題などに関してお話し頂くとともに，大森一輝さん（都留文科大学）に同書に関する論評をお願いする予定です。

報告者名：藤川隆男（大阪大学），大森一輝（都留文科大学）

報告テーマ：「藤川隆男編『白人とは何か？ ホワイトネス・スタディーズ入門』（刀水書房，2005年）をめぐって」

7. アメリカ女性史・ジェンダー研究（小檜山ルイ・東京女子大学）<ru@tmtv.ne.jp> [H23]

今年度の分科会では，国際会議参加のためのワークショップを行います。3年に一度開かれるパークシャー女性史会議が，去年サクラメントで開かれました。アメリカ学会からの参加も多かったわけですが，ワークショップでは，この会議で発表するためのプロセスを解説します。テーマを決め，パネリストを募り，プロポーザルを書く一その際の注意点や準備にどの程度の期間をみるかなどを，実際にパネルの責任者を務めた人に解説してもらいます。さらに，昨年韓国で開かれ，2年後にはスペインで開催が予定されている「女性についての国際学際会議」についての情報もできれば提供する予定。次に，来年度のアメリカ学会年次大会の部会または分科会での報告を目指して，パネルを組みます。テーマ設定，パネリストの選定などを話し合い，積極的に論文発表の機会を作るための作業を進めてみます。テーマとパネリストに関する積極的提案をお願いします。

8. アメリカ先住民研究（阿部珠理・立教大学）<juria@rikkyo.ac.jp> [H24]

アメリカ先住民に関する研究は，歴史学，文化人類学，社会学，宗教学，文学等の分野でそれぞれに蓄積があるが，本分科会ではそれらの成果を共有しつつ，垣根を越えた多角的な視点から日本における「アメリカ先住民研究」を構想する端緒としてゆきたい。初年度にあたり，「日本におけるアメリカ先住民研究の歴史と現状」をテーマに先住民研究にかかわる各分野の研究者の交流を図りたい。

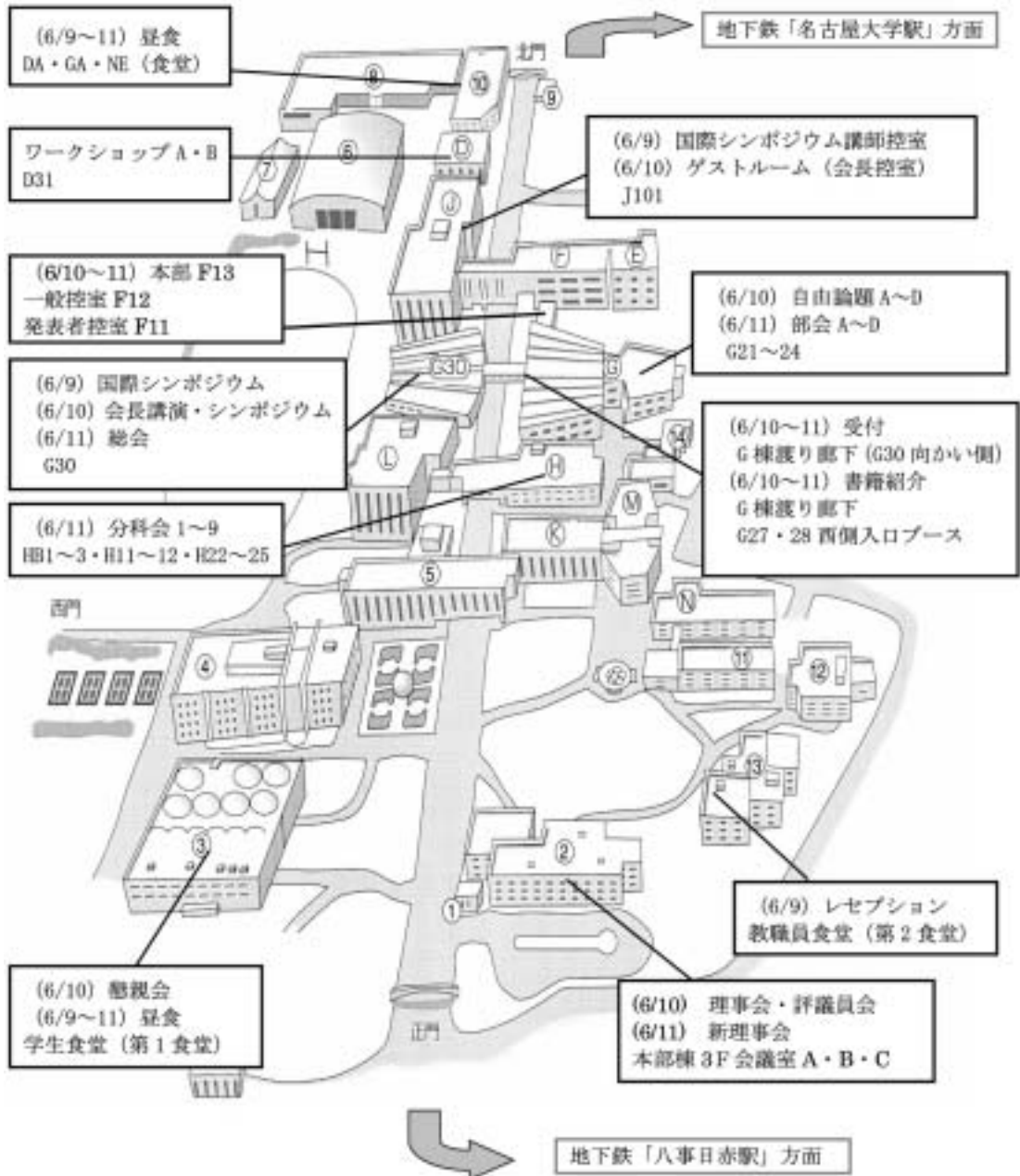
報告者 富田虎男，佐藤円，伊藤敦規，大野あずさ

タイトル 「日本における先住民研究の歴史と現状」

9. ラティーノ/ヒスパニック（庄司啓一・城西大学）<kshoji@ka2.so-net.ne.jp> [H25]

今日，アメリカ合衆国におけるラティーノ/ヒスパニックはアフリカ系アメリカ人の数を超えて，全米第一のマイノリティ集団となっている。そしてかれらの政治的・経済的影響力が増大する中，ラティーノ/ヒスパニックに対する関心も増大し，次々と優れた研究成果も出されている。日本においても，ラティーノ/ヒスパニックに関する本格的な研究が着実に前進している。また，若い研究者にもラティーノ研究を目指す者が増えている。しかしながら，それらの研究が孤立的・分散的に行われているのが現状であり，研究者間の交流と相互批判をより活発化し，研究をより体系的・組織的に行う必要性が強くなっている。また，研究上の意義という点に関わっては，ラティーノ/ヒスパニック研究は，人種やエスニシティ，シティズンシップ，ナショナリティといった概念を批判的に再検討するにあたって大いなる可能性をひめていると言えるだろう。このようなラティーノ/ヒスパニック研究の現状を踏まえて，今回は最初の会合として，出席者で今後どんな会にしたらいのか，どのようなことができるのかなどについて率直な意見を出してもらうような会合としたいと考えています。

南山大学（名古屋キャンパス）構内図



会場案内

大会受付 G棟渡り廊下 (G30向かい側本部)
 6月9日 (金曜)
 国際シンポジウム G30
 レセプション 教職員食堂 (第2食堂)
 6月10日 (土曜)/11日 (日曜)
 本部F13 一般控室 F12 講師等控室 F11
 自由論題A・B・C・D, G21~G24

会長講演・シンポジウム G30
 懇親会 第1学生食堂
 部会A・B・C・D G21~G22
 ワークショップA・B D31
 理事会・評議員会, 新理事会 本部棟3F会議室A・B・C
 分科会1~9 HB1~3, H11~12, H22~25
 総会 G30